

25 アスパラガス

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	施用の目安等
有機質資材 施用技術	<p>○たい肥等有機質資材施用技術                      土壌診断に基づき、適切に完熟たい肥等を施用する。</p>	10 t /10a (定植時 30 t /10a)
化学肥料 低減技術	<p>○肥効調節型肥料施用技術                      被覆肥料等の利用により肥効率を向上させる。</p> <p>○有機質肥料施用技術                      有機質肥料（油かす等）を用いた施肥体系とする。</p>	化学合成窒素量 ・ハウス、露地 33.6kg/10a 以内
化学農薬 低減技術	<p>○機械除草技術                      除草機械により雑草（畦畔での害虫発生助長植物も含む）を駆除する。</p> <p>○生物農薬利用技術                      生物由来の有効成分である農薬の利用により病害虫を駆除する。                      ・生物農薬：B T剤(ハモンヨトリ、材カハコガ、ヨウムシ)など</p> <p>○光利用技術                      色彩粘着板利用により害虫を捕殺する。                      黄色蛍光灯、光反射資材利用により害虫の活動抑止や忌避させる。</p> <p>○被覆栽培技術                      被覆資材により有害動植物の付着を防止する。                      ・紫外線カットフィルム（アブラムシ類、アザミウマ類）                      ・防虫ネット（開口部被覆：アブラムシ類、アザミウマ類）</p> <p>○フェロモン剤利用技術                      フェロモン剤の利用により害虫の大量誘殺や交信を攪乱させる。                      ・リトルア剤(ハモンヨトリ)など</p> <p>○マルチ栽培技術                      紫外線反射マルチ、生分解性マルチ、稲わら等利用により有害動植物のまん延防止する。</p>	化学合成農薬成分回数 ・ハウス 9成分以内 ・露地 10成分以内
<p>その他の留意事項                      有機質資材施用で肥料効果が期待できる時は減肥する。また、土壌分析により施肥量を調節する。                      当該作物は、湿害を受け易いので、排水対策を十分に行う。                      地上部刈り取り後の株等はバーナーで焼却する。</p>		